

賀川豊彦『友愛の政治経済学』における 「意識」と「心理学」の概念

渡部 和隆

(和文要旨)

宗教と経済との関係は現代において、非常に重要な問題である。本論文は日本を代表するキリスト者の一人である賀川豊彦が、宗教と経済との文脈において「意識」「心理学」の概念が果している役割についてどのように考えているかを、彼の著作『友愛の政治経済学』の分析を通して明らかにするものである。なぜなら、この二つの概念は賀川が宗教と経済との双方の議論において使用しているからである。つまり、これら二つは賀川が彼の思想を構築するところの理論的な前提をなしている。経済はこれらの二つの上に築かれ、究極的にはこれら二つに支配されているのである。

最初に、これら二つを経済との関連で分析した。賀川において「意識」「心理学」は人間の経済活動を支配する統制的な機能を有している。かくして、経済学は、正統派マルクス主義の唯物論も含めて、彼の「心理学的決定論」に包摂されるのである。

次に、宗教、特にキリスト教との関連において「意識」「心理学」を分析した。賀川をこれらは神と人間とが共有する存在論的な実在だと考えており、これらを通じて神は人間とともに人間の社会を改良すべく、働くことができるのである。

結論としては、「意識」「心理学」は認識論的な性質と存在論的な性質との二重の性質を有している。神と人間とが全ての人類の苦しみを救済するために働くことができるのは、これら二つを通してなのである。賀川は、神の意識にとって経済は不可欠な要素だと考えており、それはイエス・キリストの「贖罪愛」を通して歴史のうちに啓示されたものなのである。

(SUMMARY)

The relationship between religion and economics is one of the most important issues in the contemporary world. In this paper, I have attempted to explain how Toyohiko Kagawa, one of the most famous Japanese Christians, understands the role that “consciousness” and “psychology” play within the context of religion and economics. In short, these two fundamentally human traits comprise the theoretical form--the premises--upon which he constructs his thesis: the conclusion that economics is squarely premised upon and is ultimately governed by the evolution (or devolution) of these two traits.

First, I analyze how, in Kagawa’s analysis, these two words are connected to the study of economics; that is to say, I clarify Kagawa’s methodology. Starting from an a priori claim that human “consciousness” and human “psychology” comprise the necessary antecedents of all human economic activity, Kagawa builds his paradigm of Brotherhood Economics. According to Kagawa, any other paradigm, regardless of its quantitative sophistication, is fundamentally flawed.

I then analyze the roles “consciousness” and “psychology” play in the context of religion, especially of Christianity. Kagawa uses these two words to show an ontological entity which God and human beings both possess and through which God can cooperate with human beings with the purpose of improving all human societies.

In conclusion, “consciousness” and “psychology” possess a dual nature – an epistemological reality and an ontological reality. It is through this shared reality that God and human beings are able to cooperate to relieve all human social suffering. Economics, Kagawa believes, is an inalienable component in the evolution of God’s “consciousness”, the ultimate expression of which was revealed in history through the redemptive love of Jesus the Christ.

序

経済人類学者カール・ポランニーは現代の経済の特徴として「社会関係のなかに埋めこまれていた経済システムにかわって、今度は社会関係が経済システムのなかに埋

めこまれてしまった」⁽¹⁾ ことを挙げ、次のように述べている。

「私が願うのは、生産者としての毎日の活動において人間を導くべき、あの動機の統一性を回復することであり、経済システムを再び社会のなかに吸収することであり、われわれの生活様式を産業的な環境に創造的に適応させることである。」⁽²⁾

現代は、経済が社会の他の領域から自律して運動するようになり、社会全体に大きな支配力をふるうようになった時代である。したがって、社会から離陸した経済をいかにして再び人間の制御の下に戻すかが問われている。これは実に、キリスト者賀川豊彦が『友愛の政治経済学』において既存の経済学に対して人間の「意識」を優位におく「心理学的経済」(BE53)を唱えた際、既に問題としていたことでもあった。以下、本論は賀川豊彦の“BROTHERHOOD ECONOMICS”(邦題『友愛の政治経済学』)における「意識」(Consciousness)と「心理学」(Psychology)の概念に着目し、賀川において経済と他の諸領域との関係がどのように考えられているのかを分析する⁽³⁾。その際、賀川のキリスト教信仰との関係もまた射程に入るであろう。本論はそのための試論である。

なお、賀川が「意識」「心理学」を使用している箇所は、その類義語も含めると、以下の表の通りである。括弧内の数字はそのページでの使用回数を表している。

Contents	consciousness	psychology
Preface	p. X	p. X
Is there a Way Out of Chaos?	p.3	
Christ and Economics	p.28 p.30 p.31 p.32(3) p.33(3) p.36(3) p.37(2) p.38(2) p.43(4) p.44(2)	p.27 p.29 p.30

⁽¹⁾ カール・ポランニー『経済の文明史』筑摩書房 ちくま学芸文庫 2003年、p.65.

⁽²⁾ 上掲書 p.68.

⁽³⁾ 本論では、“Brotherhood economics” by Toyohiko Kagawa, New York : Harper, 1936 を使用し、その場合は引用後に BE と表記してページ番号を示した。なお、訳出の際、邦訳の賀川豊彦『友愛の政治経済学』日本生活協同組合連合会出版部 2009年を参考にした。

The Fallacy of Materialistic Economics	p.47(3) p.48 p.49(2) p.50(4) p.51(5) p.52(5) p.53(5) p.56(2) p.58(2) p.60(3) p.61(2) p.62(2) p.63(2) p.67(3) p.69(4)	p.52 p.53(4) p.55(4) p.56(4) p.57(1) p.59 p.60(2) p.61(3) p.64 p.65(4) p.66(3) p.68
Philosophy of Change	p.75(2) p.76(3) p.77(10) p.78(2) p.80	p.74
Brotherhood Love Through the Ages		p.91
The Modern Cooperative Movement	p.101 p.106 p.108 p.112 p.113(2) p.114	p.105
Brotherhood Love in Action	p.122 p.135 p.137 p.138 p.140 p.148(2) p.149 p.150	p.123 p.143
The Cooperative State	p.154 p.163 p.172	p.161 p.162(2) p.173
World Peace Built on Brotherhood Love	p.181 p.193 p.194 p.195(6) p.196	p.195

また、「意識」と「心理学」との関係についてであるが、賀川が Preface において「この本で、私は心理学的なもしくは意識的な経済 (psychological, or conscious, economy) を通して新しい社会秩序に到達する新しい道を発見しようと試みた。」(BEX) と述べているのをみると、両者はほぼ言い換え可能な同義語として使われていると考えることができる⁽⁴⁾。ただし、上述の表より、「心理学」は「意識」よりも使用頻度が少なく、かつ第三章の「唯物論的経済観の誤り」に集中していることから、この言葉は「意識」よりも狭い意味で使用されているのではないかと推測される。

⁽⁴⁾ 「心理学」が学問の名称であり、「意識」はその対象であることを考えれば、両者を同義語と扱うことには違和感があるかもしれない。しかし、英語の psychology は単に「心理」とも訳せる言葉であり、それなら「意識」と同義語であってもおかしくはない。実際、本書の邦訳である賀川豊彦『友愛の政治経済学』日本生活協同組合連合会出版部 2009 年においてはこの言葉は「心理的」と訳されている。本論では、次の節でみるように、psychology という言葉が経済に関する認識論的な議論において多く登場していることから、その認識論的なニュアンスを出すために敢えて「心理学」の訳語で統一した。

1. 「心理学的経済」と唯物論批判

まず、賀川が「意識」「心理学」を経済と関連でどのように論じているのかを分析する。賀川は建築を例にして「意識」と物質とを密接に結び付けている⁽⁵⁾。建築は人間の物理的物質的な必要から生じるが、他方で建築様式という形で人間の「意識」の影響を受ける。賀川はジョン・ラスキン『ヴェニス石』を参照しつつ、建築がいかにその当時の人間の「意識」の影響を被るかについて述べ（BE52を参照）、以下のように結論づける。

「これを考慮しても、私たちは身体的な必要のための必需品が人間の意識の覚醒（the conscious awakenings of man）と基本的な関係を有しているという真理を無視することはできない。」（BE52）

ここで重要なのは賀川が建築という複数の人間による共同作業を事例に「意識」という言葉を使用している点である。「意識」は人間と人間との間に共通する集団的なものとして述べられている。賀川はこれを「社会意識」（social consciousness）と呼ぶ。賀川によれば、「意識」は個人だけのものではない。賀川によれば、プロテスタンティズムは「個人の意識」（individual consciousness）に神学的思惟を集中させたが、それは誤りである。プロテスタンティズムの「個人の意識」への偏りが霊的生活と経済的生活とを分離して考えるという経済学の誤謬を招いたと賀川は強く批判する。しかし、機械論的唯物論的な資本主義が社会を支配したとき、プロレタリアートによって「社会意識」の覚醒がもたらされた。経済活動においては「個人の意識」と並んで「社会意識」も重要な機能を果たす。

「一片の石炭の価値は、あなたがそれを動力のために燃やすか、染料を生産するために使うか、それから薬を抽出するかによって変化する。これらの価値の変化は、石炭自体のためではなく、人間の意識（man's consciousness）のためである。したがって、

⁽⁵⁾ 隅谷三喜男は賀川が「精神と物質の二元論を拒否し、人間存在を生命＝人格の一元において、物質的存在と精神的存在との統一として、とらえようとしたことは、ほぼ誤りないであろう。」と述べている。隅谷三喜男『賀川豊彦』岩波現代文庫 2011年、pp.23-24.

物質的な資本の真の価値はそれが個人の意識 (individual consciousness) と社会意識 (social consciousness) との関係において見られるときにのみ発見されうる。」(BE62～63)

人間の「意識」や「社会意識」が経済活動の前提条件、すなわち物に価値を認識するための必要不可欠な条件として登場している。「意識」は経済活動に先だって必要な価値の認識を可能とする統制的な機能を果すのである。「社会意識」もまた、「個人の意識」とは区別されつつも、ともに経済活動に先行する条件として現われる。「社会意識」は「個人の意識」と並んで、「ある時代の文化は、それが物質的な生産と分配と消費との形態を発達させて支配するところの、人々の意識的な生活 (the conscious life) の覚醒の度合によって決定される。」(BE60) とあるように、経済を支配する条件として登場するのである。賀川によれば、彼の従事した組合運動もまたこの「社会意識」の覚醒のうちにある。「覚醒しつつある社会意識 (The awakening social consciousness) は生産と消費との二つの角度から発達してきた」(BE53) ののであるが、組合運動との関係で特に重要なのは消費である。なぜなら「利益をもたらすのは消費者である」(BE102)⁶⁾ という経済原理が組合活動によって歴史上初めて発見されたことを賀川は重視するからである。生産は重要な経済の契機ではあるが、物を生産するだけでは利益は生まれない。生産物が商品として流通し、消費されて初めて利益が生じる。賀川はこの消費という契機をもとに経済の議論に「意識」「心理」の議論を導入し、組合活動の展開をも視野におく。

「人々の意識 (The consciousness of people) は、生産の経済と同様に、消費の経済の重要性に対しても目覚めなければならない。そのような意識が喚起されるまでは、資本主義は市場を完全に支配するための力をふるい、他の共同組合の努力を無駄なものとするだろう。協同組合運動の前進 (progress) は、人々を消費の経済の重要性に目覚めさせることに大きく依存している。」(BE148)

賀川が携わった組合運動は消費という経済の契機に対する人々の考え方に依存する。

⁶⁾ なお、賀川がここで挙げているのはイギリスのロッチデール生協である。

そして、消費協同組合は「社会意識」によって左右されており、「生産者集団の繁栄は消費者に対する関心の問題であるという認識と、これは後者の消費者の組織化と計画化とを考慮に入れなければならないという認識」(BE150)に依存していると賀川は言う。このように、賀川が携わった組合運動もまた、「社会意識」という統制的なものによるのである。「生産、分配、消費、所有権、相続、契約権といった問題は全て社会心理学 (social psychology) の発達によって影響される」(BE65) というわけである。

賀川の、正統派マルクス主義をはじめとする諸経済学者の「唯物論的経済観」(Materialistic economics)⁽⁷⁾への批判は、それらがこの先行する認識の存在を把握していないことである。経済が純粋に唯物論的であるならば、そもそも搾取などは起こらないと賀川は主張する。搾取が起こるならば、搾取に帰結するような「意識」が経済活動に先行して成立しているはずである。なぜなら、経済活動には「意識」による認識が先行しなければならず、「人はその経済の実践においてその心理学的な含蓄 (psychological implications) から逃れることはできない」(BE66)からである。したがって、搾取が起こる場合、経済は「自己中心的な搾取のシステム」(a system of egocentric exploitation) (BE66)という一定の心理学的な意味を既にもっている。下部構造が上部構造を決定するという正統派マルクス主義の唯物論に対し、賀川はむしろ下部構造の成立には上部構造が先行しなければならないと主張しているのである。下部構造が上部構造を決定するよう見えるのは、経済を分析する際に下部構造の機能を重視するような上部構造が既に先行して成立しているからにすぎない。したがって、賀川は「唯物論自体が心理学的唯物論である」(BE65)と結論づけ、マルクスの議論を自分の議論の内側に包摂する⁽⁸⁾。唯物論的な決定論は心理学的な決定論に包摂され、「カール・マルクスの唯物論的決定論の代わりに、心理学的決定論 (psychological determinism) が社会経済観をますます支配し始めた」(BE64)というわけである。かくして、経済は「意識」「心理学」の媒介により再度、人間の制御下に取り戻されるのである。

⁽⁷⁾ もっとも、賀川が「唯物論的経済観」(Materialistic economics)で指しているものについては検討の余地がある。一応、賀川は「唯物論的経済観」(Materialistic economics)の例として様々な経済学者を挙げ、特にカール・マルクスを挙げている。おそらく賀川がここで想定しているのは下部構造が上部構造を決定するという正統派マルクス主義の唯物論であろう。しかし、それがマルクスの理解として正しいものだろうか。今後の課題としたい。

⁽⁸⁾ もっとも、これが成功しているか否かは今後の課題としたい。

2. 神の意識と贖罪愛

さらに、賀川はここに経済と宗教との接点を見出す。経済活動が先行する「意識」の認識を帯びるならば、「意識」の発達と共に経済活動は「人間の交換の行為と人生の目的とは分離され得ない」(BE69)段階に至るはずである。経済活動は段階的に「生理経済」(physical economics)、「感覚経済」(sense economics)そして「意識経済」(conscious economics)に至ると賀川は言う(BE46)が、最後の「意識経済」の段階では「交換価値でさえ意識的(conscious)となり、宗教的価値へと同化していく」(BE69)と賀川は述べる。人間の「意識」が人間の経済活動においてはそれを可能とするところの先行する認識を生み出しているのだから、経済と宗教との接点が生じるのである。宗教と経済とは結合し、最終的に「私は、問題の解決は人間の覚醒しつつある宗教的意識(man's awakened religious consciousness)に基づいた新しい宗教的経済において見つかるだろうと確信している」(BE47)という結論になるのである。では、「意識」「心理学」は宗教との関連ではどのように使用されているのか。本書ではキリスト教思想は全体にわたって述べられているが、特に第2章の“Christ and Economics”に集中しているため、ここの箇所を中心に分析を行う。

『友愛の政治経済学』におけるキリスト教思想の議論で注目すべき点は「意識」の主体が二重化されている点である。賀川は信仰を「神による可能性を信じること」(BE35)だと説明し、そのこと自体が人間の活動を要求すると主張する。信仰は「人間のチャンネルを通して流れ出る神の活動」(BE36)を要請し、それなしではいくら神であっても現世で働くことができない。信仰とは静的(static)なものではなく、行動的(active)なものであり、「人間のチャンネルから流れ出る超人間的な力が愛の形で自らを示すという信念」(BE37)なのである。愛は神より来るが、人間が信仰によりその可能性を信じて神の「チャンネル」とならない限り、神は愛の可能性を実現させることもできない。神と人間とは協働しなければならないのである。「実に、愛とは人間のチャンネルを通して流れる神の活動」(BE36)なのである。このような神より来る愛を賀川は「贖罪愛」(Redemptive love) (BE36)と名付け、次のように言う。

「贖罪愛は全体的な意識(total consciousness)、すなわち神意識(God-consciousness)に由来する。だからそれは神より来る。このような愛は人間の意識(man's consciousness)

のチャンネルを通して流れ出るが、神が作った模範 (a God-made pattern) に従っている。」(BE 36)

ここで賀川は「意識」を存在論的実在とし、二重の主体を想定している。一方は人間であり、他方は神である。問題は両者の関係である。「神意識」は全体的な意識であるが、働くためには「人間の意識」を「チャンネル」として要請する。両者は区別されながらも、「神意識」が「贖罪愛」として働くための「チャンネル」という形で「人間の意識」と関係づけられる。その際、模範的な「チャンネル」として賀川の念頭にあったのはイエスではないかと推測される⁹⁾。賀川にとって「イエスの宗教の偉大さは彼の説教の優秀さにあるのではなく、むしろ彼の意識 (His consciousness) が神のものの一つであったという事実にある。」(BE31~32) とあるように、イエスとは神の意識と人間の意識とが一体となっている存在者であった。

「私たちがキリストを神の言葉として語るとき、私たちが意味しているのはキリストが人間の相対的な生のうちに絶対的な贖罪愛の意識 (the consciousness of absolute redemptive love) を分け与えた (imparted) ということである。(中略) 実に、人間の意識 (the consciousness of man) に神の言葉を分け与えることができるのは贖罪愛以外には存在しない。」(BE38)

イエスにおいて、彼の人間の意識と「神意識」とは一つとなっており¹⁰⁾、そこから「神意識」すなわち「贖罪愛」が人間に分けられ、人間のなかに与えられる。主体を異とする二つの意識は、区別されつつも、イエスを接点とし、「贖罪愛」を分け与えることによって一つとされる。そして、この愛を通して「神の声がこだまする」(BE38)

⁹⁾ なお、賀川においては「チャンネル」自体はイエスに限られたものではなく、全ての人間もまた「チャンネル」になりうるものであった。鶴沼裕子「賀川豊彦試論：その信の世界を中心に」『聖学院大学論叢』9(2)1997年、pp.1-15を参照。本論では「チャンネル」の典型例もしくは模範例としてのイエスという観点から分析を行う。

¹⁰⁾ この賀川のキリスト論に海老名弾正のキリスト論との類似を指摘することは可能であろう。海老名と賀川との関係については、両者を自由主義神学という観点から分析したC. H. ジャーマニー『近代日本のプロテスタント神学』布施濤雄訳、日本基督教団出版局 1982年という先行研究が存在する。特にその第2章を参照。

のである。人間はこの「意識」の二重性を媒介として神の働きの「チャンネル」となる。かくして、神の働きとしての愛が人間のチャンネルを通して流れ出す。「実に贖罪愛以外に神の言葉を人間の意識 (the consciousness of man) に分け与えるものはない」(BE38) のである。賀川はここで、区別はしつつも神と人間とに共通して存在し、神から人間へ分け与えられる存在論的実在として「意識」を想定し、それを神認識や信仰の基礎においている。

そして、賀川にとって、そうした「意識」から得られる「神の愛は人類を完全に救い得るもの」(BE39) であった。先に「贖罪愛」を通して「神の聲がこだまする」(BE38) と述べたが、このイエスの十字架によって示された「贖罪愛」のなかでイエスは「人間を新しい見方で、すなわち神の立場から人間を見て、人類の救済に対する神の責任の重荷を共有した」(BE32) と賀川は言う。

「個人の過ちは宇宙全体の苦しみを引き起こす。それゆえ、キリストの贖罪愛は、社会を全体として救うための個々の魂の救済を意味する。」(BE32)

賀川によれば、「神の救いは個々人の魂のためだけでなく、社会全体のためであった」(BE41) のであり、神の救いを実現するために「神の愛の力によって救われたものは今度は他者を救うように努力しなければならない」(BE41) のである。「そうした努力自体が彼らの宗教的生活の実体をなす」(BE41) のである。かくして、神の救いは個人のみならず、さらに個人の救いを介して社会全体に及ぶ。「もし、キリストの十字架の意識 (the Cross-consciousness of Christ) が全人類によって理解されることになれば、理想的な社会が容易に産出されうるだろう。」(BE32) ということになるのである。

3. 結論

以上の分析より、次のような結果が得られた。「意識」「心理学」は人間と人間との間に成立するものと想定され、特に認識論的な機能を与えられる。経済活動の前には経済活動を可能とする価値の認識が先行しなければならない、「意識」は先行する認識のための統制的な条件として機能している。それにより経済は再び人間の制御下に取り戻されることとなるのである。同時に、それらは神と人間とに共通する存在論的実在

ともされ、神から人間に分け与えられるによって人間を「チャンネル」とした「贖罪愛」を可能とするものとされる。賀川にとって「意識」は確かに存在する実在であり、人間を通して神に働きを世に示す。そして、これは個人の救いを介して社会全体にまで波及していく。賀川自身の組合活動もこうした「贖罪愛」の一環なのである。

ここから、次のことが結論として言えるだろう。上記の二つの議論は働きという点で一致している。神は人間の「意識」のチャンネルを通して働き、人間の「意識」は経済活動においては統制的な機能を果たす。神は経済に対し、イエスの十字架において示された「贖罪愛」として、人間の「意識」のチャンネルを通して働いているのである。人間はそんな神の働きと協働することによって経済の変革に向かって働きかけていくことができる。したがって、「この十字架を背負う愛が社会経済の原理として認められることになれば、経済世界に革命が起こるだろうと私は信じる。」(BE34)ということになるのである。

賀川は、「十字架を背負う愛」について「それは墮落した (degenerate) 魂のうちに神の国の成長の力をよみがえらせる (regenerate)」(BE33) と述べているが、このように、神が人間のチャンネルを介して神の国を実現させることのうちに、経済問題や社会問題の解決が含まれているのが賀川の特徴であり、それはポランニーのような現代の問題意識にも通じるものがある。そして、それを可能としているのが「意識」と「心理学」なのである。

キーワード

賀川豊彦、『友愛の政治経済学』、意識、心理学、経済学、宗教、キリスト教
(Keywords)

KAGAWA Toyohiko, BROTHERHOOD ECONOMICS, consciousness, psychology,
economics, religion, Christianity